

大子町立生瀬小学校における地域学習の授業開発と実践

XIE CONG

I. はじめに

身近な地域の学習は、戦前の郷土学習以来、盛んに提唱され、戦後は地域学習として様々な実践が行われている。特に、1980年代以降、少子化の進行に伴い若年層の人口が減少していく。そこで、農山村地域においては人口減少と過疎化の進行により、地域の衰退・消滅に拍車をかける。こうした事態を防ぐためには、地域学習がさらに注目されるようになった。

地域学習の意義については、従来から多くの研究蓄積がある。例えば、石井(1987)は、社会科の授業で地域を扱う意味を次の6点にまとめた。①地域教材は子どもの興味・関心を集める。②地域教材は子どもの感覚をみがく。③地域教材は子どもが直接経験できる。④地域教材は子どもが直接観察・比較できる。⑤地域教材は子どもの共感を引き起こす。⑥地域教材は子どもの主権者意識を育てる。朝倉(1989)が社会科教育における地域学習の意義を次の4点にまとめた。①地域は社会事象を意味づける場である。②地域は社会生活の原則を発見させる場である。③地域は社会の発展を願う気持ちを養う場である。④地域は社会科の学習能力を育成する場である。佐藤(1986)は、地域学習が現在の教育において重要視されてきた要因には、二つがあると強調している。一つには、地域社会に内在する文化創造力、教育力により、地域社会が主体的に独自の教育を推進していくことの重要性である。二つには、地域社会とそこにおける文化を継承し発展させていくことがわれわれにとっての課題であることである。竹内(2019)は現代社会が直面する深刻な地域(社会)問題の解決と地域に生きる子どもたちが抱える様々な課題を克服するために、次の二つの視点を取り上げた。①地域学習が地域再生・創造の一翼を担う。②地域学習を通して地域に生きる子どもの自己形成を促す。

したがって、地域学習の意義は基本的に子どもの自己形成と地域社会の発展という二つの視点に分けられている。その関連性については、子どもたちは地域学習を通して、資質能力を育てるだけでなく、地域の発展を自分事として受け入れ、地域の活性

化や持続可能な社会の実現を目指すようにすると考える。

初等の教科教育においては、地域学習がすでに学習内容の一部として視野に入っている。主要な教科は社会科、生活科、総合的な学習の時間である。これらの教科を通して、学校教育においては地域学習の役割を果たすことが求められている。

2017年に告示された小学校学習指導要領（文部科学省、2017）においては、「社会科」の目標について、地域の地理的環境、地域の歴史や伝統と文化を通して社会生活を理解することが提示されている。また、社会科の内容は、第3学年に市を中心とし、第4学年に県を中心とする地域社会に関する内容が取り上げられている。「生活」の場合、「身近な人々、社会、自然」の学習や自分との関わりが言及されている。「総合的な学習の時間」の探求課題について、「地域の人々の暮らし、伝統と文化等地域や学校の特色に応じた課題」が取り上げられている。

しかし、令和3年度全国学力・学習状況調査報告書において、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問に対して、肯定的な回答（「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」）をした小学生の割合はそれぞれ17.9%と34.6%であった（国立教育政策研究所、2021）。この結果からみると、小学生は地域や社会に対する関心が高いとは言えない。また、松尾（2019）は大分県公立学校の現職教員を対象としてアンケート調査を行った。その結果から、9割以上の教員が、地域学習の重要性を認識した上で、各学年で地域学習を実施していたことがわかった。しかし、「地域学習を実践するにあたって悩みがあるか」と問った結果、95.3%の教員が「悩みがある」と回答した。その回答者のうちで、「具体的な悩みや難しいと感じている点」について、「教材準備に時間がかかる（65.3%）」と回答した教員が最も多かった。

以上のことから、地域学習は教育内容として取り上げられているが、実際に実施されると、教員にとって不得手なところがあり、学習効果が高くないことがわかった。本研究では、茨城県久慈郡大子町立生瀬小学校を調査対象とし、地域学習における授業がどのように開発されており、そして、どのように実践されているのか、明らかにすることを目的とする。

この目的を達成するために、以下の手続きで研究を進める。第Ⅱ章では、本研究の研究方法を説明する。第Ⅲ章では、生瀬小学校および大子町の概況を紹介する。第Ⅳ章では、地域学習の目的、授業開発、授業実践、直面している課題から、生瀬小学校が授業においてどのように地域学習を実施しているのかを明らかにする。第Ⅴ章では、以上の分析に基づき、生瀬小学校における地域学習の特徴をまとめて検討する。

Ⅱ. 調査の方法

本研究では、関連資料を収集したほか、生瀬小学校の教員2名に半構造化インタビュー

第1表 インタビュー調査の質問項目の枠組み

カテゴリー	質問項目の枠組み
学習理念	地域学習の目的と地域素材の選定
学習内容	地域学習における教科の位置付けと学習内容
授業実践	地域学習における授業実践の実態
	地域学習における授業実践の課題

(筆者作成)

ュー調査を行った¹⁾。

竹内(2014)は、①学習環境の整備、②教育内容・教材、③学習過程・教授行為という三つの観点から地域学習を構想している。友居(2022)は尼崎市における地域学習の授業について聞き取り調査を実施した。その調査結果が学習理念、授業準備、授業実践、学習評価、4つのカテゴリーに分けられている。本研究では、竹内と友居の研究を参考にしうえて、インタビュー調査の質問項目の枠組みを第1表に示す。また、インタビューを受けた教員の職務により、この枠組みに基づき、異なる質問項目を作成した。

Ⅲ. 調査協力校及び所在地域の概況

1. 生瀬小学校

大子町立生瀬小学校は小生瀬小学校と内大野小学校の統合により、創立された。近年、少子化の影響を受け、児童数は年々減少傾向にあり、2022(令和4)年度で第2表のように34名になった。

生瀬小学校は児童数が少ないが、敷地面積は、建物敷地が8102m²、運動場が14067m²、その他の敷地が48381m²、合計70550m²である²⁾。この面積からみると、小さな学校とは言えないであろう。また、生瀬小学校は自然環境に恵まれて、校舎は山の高台にあり、山や谷に囲まれている。四季がはっきりしているため、植物(例えば、桜、紅葉等)や野生動物(例えば、野ウサギ、イノシシ、キツツキ等)の種類には多様性がある。その豊かな自然環境が学校の大きな特色である。さらに、学校の近くには裏山やたんぼがあり、生瀬小学校はそこで自然に親しむ教育活動を行っている。

生瀬小学校のもう一つの特色は、充実した教育課程である。生瀬小学校では、「未来を幸せに生きる力を育む教育の推進」を教育理念とし、学校の実態と学習指導要領の趣旨と社会の変化に対応する教育を踏まえ、バランスをよくとれて教育課程を編成した。第3表は令和4年度のプロジェクト目標を示したものである。

第2表 2022（令和4）年度生瀬小学校児童数一覧表

学年	在籍数		合計
	男	女	
1 学年 1 組	3	1	4
2 学年 1 組	2	3	5
3 学年 1 組	3	3	6
4 学年 1 組	1	5	6
5 学年 1 組	3	3	6
6 学年 1 組	4	2	6
やまびこ学級	1	0	1
	17	17	34

（令和4年度生瀬小学校の学校要覧³⁾より抜粋）

第3表 2022（令和4）年度のプロジェクト目標

学びのプロジェクト（知）	個別最適な学び・協働的な学び
心のプロジェクト（徳）	体験活動の充実と豊かな心の育成
体のプロジェクト（体）	健康管理能力の育成と体力の向上
グローバル社会への対応	ICTと外国語教育の充実
インクルーシブ社会への対応	理念を踏まえた特別支援推進

（令和4年度生瀬小学校の学校要覧⁴⁾をもとに筆者作成）

2. 大子町

生瀬小学校にある大子町は茨城県の北西部に位置し、福島県や栃木県に接している。大子町は豊かな自然環境を有している。例えば、日本三名瀑のひとつに数えられる「袋田の滝」、茨城県最高峰八溝山、久慈川が代表的である。また、豊かな自然環境を生かした農業や林業も盛んに行われており、りんごやこんにゃく、お茶が代表的な農産物である。

昨今、少子化の影響により、子どもの数が減り続けているが、高齢者の割合が増えています。しかし、大子町は安心して子育てができる町づくりを目指して、子育て支援住宅の建設や小中学校における教材や給食の無料化を進めてきた。また、前述した生瀬小学校のように、ICT教育が盛んに推進されている⁵⁾。さらに、大子町は郷土愛に溢れる子どもを育むために、「大子学」⁶⁾を地域学習の重要な内容として学校教育に位置付けている。

IV. 地域学習における授業開発と実践

1. 地域学習の目的

生瀬小学校の組織目標は「自分をやり抜く力の育成 仲間と高め合う心の育成」である⁷⁾。また、大子町の学校教育目標は「ふるさと大子を愛し、賢く（知）、豊かに（徳）、逞しく（体）生きる子を育てる教育 知識とともに知恵を、答えとともに術（方法）を…～温かな人間関係と豊かな自然環境を活かした教育の創造を通して～」である⁸⁾。

生瀬小学校では、地域学習の目的が「自然に親しみ、郷土を愛する」とされているが、学校の目標と大子町の学校教育目標の枠組みから乖離していない。例えば、地域学習を通して、「やり抜く力」・「高め合う心」や『知・徳・体』のバランスの取れたことも重視されている。なぜかという、生瀬小学校では、「地域学習」を学校教育全体の一部として認識し、その目標も無論学校教育全体や大子町の学校教育を踏まえる必要があるからである。

2. 地域学習における授業開発

a) 地域素材の選定

生瀬小学校では、地域学習が主に生活科、社会科、総合的な学習の時間、理科という4つの教科において行われている。地域素材を選択する視点としては、主に「学習指導要領に取り上げられる内容（社会科や理科）」と「融通が利く内容（生活科、総合的な学習の時間、学校行事）」という二つがあげられる。具体的な素材については、主として地域の環境と地域の産業という2種類に分けられる。例えば、1年生活科での敷地内の昆虫や植物、2年生活科での地域マップ、3年社会科でのりんご園やイチゴ園、総合的な学習の時間や学校行事での森林環境である。

b) 地域学習における教材の活用

生瀬小学校では、教員の多忙化により、地域学習に関連する授業が教科書や副読本をベースにして行われている。そこで、総合的な学習の時間と社会科に着目して、活用された教材を取り上げて分析する。

総合的な学習の時間の全体計画においては、「大子学」が重要な教育内容として組み込まれている。「大子学」のテキストである『大子学のすすめ～大子で学ぶ 大子を学ぶ 大子のために学ぶ～』（以下『大子学のすすめ』と略す）には時間ごとにワークシートが付いているため、生瀬小学校はそれを活用しながら授業を行っている。小学校の段階での学習テーマは第4表に示す。学習内容は多様的で、自然、産業、歴史等様々な面が含まれている。子どもは「大子学」を通して、「地域の伝統や文化のもつ特徴」、「地域の伝統や文化の継承に力を注ぐ人々の思い」、「地域の一員」として、伝統や文化を守り、受け継ごうとする活動や取り組み」を学習することが可能である⁹⁾。

第4表 「大子学」における小学校の学習テーマ

学年	学習テーマ
1 学年	大子町のキャラクターを知ろう
2 学年	大子町のシンボルを知ろう
3 学年	大子町の自然環境を知ろう
4 学年	大子町と農林水産省
5 学年	大子町の自然を知ろう
6 学年	大子町の歴史を知ろう

(『大子学のすすめ』¹⁰⁾をもとに筆者作成)

また、大子町では、「生活科・総合的な学習の時間研究部」の事業として、毎年、各学校は公民館で「大子学」の学習成果を発表する。発表の形式は児童生徒が書いたワークシートを展示することである。

社会科においては、地域学習は主に第3学年と第4学年で実施される。大子町にある生瀬小学校では、第3学年で大子町を中心に、第4学年で茨城県を中心に、授業が行われる。そのため、『小学校3・4年社会科副読本だいご』（以下『社会科副読本』と略す）が参考になって教員に活用されている。副読本の単元は第5表に示す。

『社会科副読本』は「大子学」と異なり、主に学習指導要領や教科書（大子町は東京書籍版『新しい社会』を使用している）の枠組みに基づき、地域の特色を生かし、大子町と茨城県に関する学習内容を補完するものである。例えば、小学校4年の「8. きょう土の伝統・文化と先人たち」では、大子町にある八溝山の植林や特産物のこんにやく粉が取り上げられる。

また、初等社会科は一般的に問題解決的な流れを踏まえ、「つかむ」「しらべる」「まとめる」「いかす」という4つの段階で学習過程が構成されるため、『社会科副読本』はその「しらべる」段階で地域の様々な情報を提示するという役割を果たすことが多い。

さらに、子どもはこのような地域教材を読んで、地域にかかわる情報を事前に掴むことができる。そして、教員は子どもの実態を把握することができ、フィードバックもやりやすくなるという。したがって、社会科における地域学習においては、副読本が欠かせない重要な役割を担っている。

第5表 『社会科副読本』 もくじ

学年	単元
3年	1. わたしたちのまち (1) 学校のまわり (2) 町ぜんたいのようす
	2. はたらく人とわたしたちの暮らし (1) 農家の仕事 (2) 工場の仕事 (3) 店ではたらく人
	3. 暮らしを守る (1) 火事から暮らしを守る (2) 事故や事件から暮らしを守る
	4. 町のうつりかわり (1) 昔の道具と昔の暮らし (2) 町のうつりかわり (3) 町にのこる古いもの
4年	5. わたしたちの茨城県 (1) わたしたちの住む大子町 (2) 県全体の土地のようす (3) おもな市と交通
	6. 住みよいくらしをつくる (1) 水はどこから (2) ごみのしよりと利用
	7. 自然災害から暮らしを守る (1) 町の取り組み (2) 学校や地いきの取り組み (3) 家庭の取り組み
	8. きょう土の伝統・文化と先人たち (1) 旅沢藤治衛門と八溝山の植林 (2) 中島藤衛門とこんにやく粉 (3) 新しい町づくり

(『社会科副読本』¹¹⁾をもとに筆者作成)

3. 地域学習における授業実践

a) 学習形態について

生瀬小学校の授業においては、一斉学習が主要な学習形態だと勘違いしやすいが、学級の人数が少ないため、一般の学級の人数からみると、生瀬小学校の一斉学習は実際に「小集団学習」に相当すると言える。また、近年 ICT の活用により、学習形態が大きく変わっている。例えば、個別学習をしても、端末のクラウド上のつながりにより、協働学習していることが多々ある。端末上のやり取りで足りないときには、直接その子の机に出向き、やり取りすることもある。つまり、生瀬小学校では、特に学習形態にこだわらず、少人数の特徴を利用して、児童同士、児童と教員の信頼関係という基盤の上で、一斉学習と協働学習が自然に切り替わることが可能である。

そのうえ、ICT を取り入れた地域学習が以下のように三つの段階に分けられている。また、クラウドの活用により、すべての作業が共有されることができる。

- ・事前学習（情報収集）
- ・学習・協議（情報整理・協議）
- ・事後学習（活用・発信）

その三段階は授業で活用されており、学習プロセスを反映するだけでなく、学習形態にも影響を及ぼすと考える。

さらに、ICT 教育には空間的制約を超える利点がある。生瀬小学校のような少し不便なところにある学校にとっては、ICT の導入が授業の実施に役に立っている。なぜかという、コロナや経済的な原因で、実際に地域調査を実施しにくいことになっても、子どもたちはネットで配信された動画とかを見て、その地域の情報や地域調査の方法を学習することが可能である。

b) 学校行事との関連

生瀬小学校では、学校行事がすでに地域学習の一部になっている。第6表は今年地域学習に関わる行事予定を示したものである。学校の隣に裏山があるため、学校は森林環境を活用し、月に1回ぐらい「森のおはなし会」が行われている。それ以外、田植えや稲刈り等の農業活動も含まれている。また、授業における地域学習もこのような学校行事につながっている。例えば、今年の収穫祭である「やまびこ祭」が開催された際に、子どもたちはこれまで学んできた「大子学」を発表会という形で発表した。

以上のように、生瀬小学校の学校行事は、単発であるものではなく、教育課程の中で意味を持ち、位置付けられている。また、地域学習にかかわる教育活動は学校行事のためだけに準備することではなく、学校行事や授業とうまく関連付けていくことである。

第6表 2022（令和4）年度地域学習に関わる行事予定表

月別	行事
5月	田植え
6月	森のおはなし会
7月	森のおはなし会
9月	森のおはなし会、稲刈り
10月	森のおはなし会、脱穀、やまびこ祭
11月	森のおはなし会
12月	森のおはなし会
1月	森のおはなし会
3月	森のおはなし会

（令和4年度年間行事予定表（案）¹²⁾をもとに筆者作成）

さらに、第6表が示しているように、秋には地域学習に関わる行事が多い。行事と季節との関連性について、教育計画にも関係があるが、主要な理由として、6月～9月の頃、雨や台風が多く、また、ゲリラ豪雨や熱中症等のリスクもあるため、屋外での活動が多い地域学習は気候が安定する10月や11月に行われる傾向があるということがあげられる。そこから、生瀬小学校では、地域学習が季節の影響を受けることがわかった。

4. 地域学習における課題

生瀬小学校では、地域学習が行われている際に、直面している課題について、調査協力者の語りには4点が見られた。

第一は、人との触れ合いの機会が比較的希少である。前述のように、生瀬小学校は自然環境が豊かで、地域学習を支えている。しかし、学校が少し不便な場所にあるため、インタビュー調査を子どもにやらせたい際に、学校の周りに人や店が少なく、「町の探検」等の学習活動がなかなか実施されにくいという現状がある。

第二は、経済的な問題である。前述のように、学校が町から離れているため、地域調査が実施しにくい課題がある。それゆえ、教員たちは、バスを借りて子どもを色々な場所に連れて見学したりしたいが、経済的に地域学習が制約されており、地域調査が常々できなく困っている。

第三は、人手不足である。地域学習にかかわる活動が基本的に野外で行われており、維持の仕事が比較的に大変である。例えば、稲作の活動を導入する際に、たんぼの仕事をすべて子どもに任せるわけではないため、他人を頼んで耕さざるを得ないことになってしまう。また、夏の間は水の管理等のような仕事は労力がかかる。しかし、生

瀬小学校では、保護者の多くは過去この学校の卒業生のため、学校と家庭・地域との連携が強くて、PTA や地域の人が協力しに来ることがある。

第四は、授業開発に手間がかかることである。まず、地域学習には教科書や指導計画がそもそも存在していないため、その状況から指導計画を立案し、授業を組み立てていくということは、一般の授業よりはるかに手間がかかる。また、授業で取り扱う教材や資料も、もともと準備されているわけではなく、教員たちで地域素材の中から掘り起こさなければならない。さらに、地域人材の連絡調整にも時間がかかる。つまり、そこから、教員は地域学習を授業に取り入れるにあたり、教材開発や人員調整等が非常に労力がかかることがわかった。

しかし、生瀬小学校は、地域学習の意義を肯定し、最小の労力で最大の効果を生むために色々工夫している。その解決策が主として2点ある。1点目は、学校はカリキュラム・マネジメントの視点から、地域学習を活性化するために教育活動全体を改善することに重きをおくことである。2点目は、日頃からネットワーク構築とクラウドを活用した連絡手段を確保し、また、次年度以降に本格的に導入されたコミュニティ・スクールの活用により、学校と地域との連携を通して学習効果の向上が期待されることである。

V. まとめ

本研究では、大子町生瀬小学校に着目し、地域学習における授業開発と実践を明らかにしてきた。考察した成果は、以下のようにまとめられる。

第一に、地域学習が学校教育全体に位置付けられている。生瀬小学校では、地域学習が社会科や総合的な学習の時間等の教科において行われているだけでなく、学校教育全体に位置づけられて実施されている。授業が地域学習において一翼を担っているが、学校行事等の教育活動が重要な役割を果たすことが可能である。

第二に、地域教材が大きな役割を担っている。前述のように、教員が教材開発において手間がかかるため、『大子学のすすめ』や『社会科副読本』等の地域教材が学習内容を補完し、活用されている。それらの地域教材の活用により、教員は教材開発の負担が軽減されるだけでなく、地域学習も活性化されている。

第三に、ICT の活用により、学校教育が変わっていく。生瀬小学校では、児童数が少ないため、学級の学習形態が一般の学校と異なっている。なぜかという、学習形態は教員に仕切られるわけではなく、クラウドの活用により、共同作業が基本的な形で、一斉学習や個別学習や協働学習が自然に切り替わるのである。また、不便な場所にある生瀬小学校にとっては、地域調査が直接できなくても、ICT の活用を通して、学習内容が充実されているとともに子どもの社会認識が深まる。

第四に、学校と地域との連携が今後の課題解決の核となる。前述のように、生瀬小

学校では「人」と関わる課題について、PTA や地域の人の協力が欠かせない。それに、コミュニティ・スクールの推進とともに、学校と地域との連携がさらに深まり、地域学習が一層円滑に行われるようになることや社会に開かれた教育課程の実現が期待されている。

しかし、本研究にはまだ残っている課題が二つある。一つは、調査協力者が2名とも学校の管理職で、実際に授業をする教員の観点と異なっている可能性がある。もう一つは、授業開発と実践の視点から地域学習を分析することには限界があり、学校行事や特別活動等を含んで地域学習の実態がさらに明らかになるのだろう。以上を今後の課題としたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、大子町立生瀬小学校の先生方、大変お世話になりました。特にインタビューに答えてくださったお二人の先生方からは、多大なるご協力を賜りました。また、学校側からは貴重な資料をいただきました。深く御礼申し上げます。

注

- 1) 調査の時間が調整できなかったため、教員1名に書面で質問項目を回答してもらった。
- 2) 生瀬小学校の提供データより
- 3) 生瀬小学校の提供資料「令和4年度生瀬小学校の学校要覧」より
- 4) 生瀬小学校の提供資料「令和4年度生瀬小学校の学校要覧」より
- 5) 以下に示す資料を参考にした。

『小学校3・4学年小学校社会科副読本だいご』（大子町教育委員会ほか、2021）

『大子学のすすめ～大子で学ぶ 大子を学ぶ 大子のために学ぶ～』（大子町教育委員会、2018）

大子町公式ホームページ

<https://www.town.daigo.ibaraki.jp/>（最終閲覧日：2022年12月27日）

- 6) 「大子学」とは、大子町で生まれ育つ子どもたちが、保護者や地域の温かな人々と交流しながら、体験を通して、地域について学び、地域について発信し、ふるさとに誇りを持ち、さらには、自己の生き方についても考える学習である。義務教育9年間で児童生徒が大子町に関わる地域素材を系統的に学ぶ。内容について、『大子学のすすめ』という地域教材を用いながら各学年「総合的な学習の時間」等6時間程度を使い、これまで取り組んできた内容を活かし、各教科や領域との関連も図りながら進めることになるが、具体的な指導については、各学校におい

て定めるものとする。（『大子学のすすめ～大子で学ぶ 大子を学ぶ 大子のために学ぶ～』（大子町教育委員会, 2018）より引用）

- 7) 生瀬小学校の提供資料「令和4年度生瀬小学校の学校要覧」より
- 8) 生瀬小学校の提供資料『大子学のすすめ～大子で学ぶ 大子を学ぶ 大子のために学ぶ～』（大子町教育委員会, 2018）より
- 9) 生瀬小学校の提供資料「令和3年度「総合的な学習の時間」第3学年単元計画」より
- 10) 生瀬小学校の提供資料『大子学のすすめ～大子で学ぶ 大子を学ぶ 大子のために学ぶ～』（大子町教育委員会, 2018）より
- 11) 生瀬小学校の提供資料『小学校3・4学年小学校社会科副読本だいご』（大子町教育委員会ほか, 2021）より
- 12) 生瀬小学校の提供資料「令和4年度年間行事予定表（案）」より

文献

朝倉隆太郎（1989）：地域と地域学習の本質．朝倉隆太郎編著『地域に学ぶ社会科教育』，東洋館出版社，pp. 10-12.

石井重雄（1987）：『地域に学ぶ社会科』，岩崎書店．

国立教育政策研究所（2021）：令和3年度全国学力・学習状況調査報告書．

<https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/report/data/21qn.pdf>（最終閲覧日：2022年12月26日）

佐藤照雄（1986）：『地域文化を探る——地域学習の課題と方法』，株式会社教育出版センター．

竹内裕一（2014）：地域学習を軸とした社会科・地理教育カリキュラムの創造．千葉大学教育学部研究紀要，**62**，pp. 1-12.

竹内裕一（2019）：地理教育における地域学習の位置—子どもたちの地域学習体験からの逆照射—．新地理，**67**(1)，pp. 1-12.

友居秀行（2022）：尼崎市における地域学習のあり方の研究—地域学習の授業実態と教師の意識調査を通して—．兵庫教育大学地理学・地理教育研究室研究報告，**27**，pp. 10-20.

松尾朱夏（2019）：大分県公立小学校における地域学習の現状と課題—現職教員を対象としたアンケート調査を基に—．大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，**37**，pp. 51-64.

文部科学省（2017）：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編．

https://www.mext.go.jp/content/20201203-mxt_kyoiku01-100002608_3.pdf（最終閲覧日：2022年12月26日）